君と僕の適合理論

トモナガヒイロ

注意事項

　このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
　この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君と僕の適合理論

【Ｎコード】
Ｎ２７８５ＢＸ

【作者名】
トモナガヒイロ

【あらすじ】
　主人公、不発橋了一は県内有数の進学校に通う高校３年生。進路選択が迫るある日、自分の将来について考えた了一は「本当に自分がやりたいこと」が分からず悩み苦しんでしまう。悩む了一に母親が言う「自分がしたいことが分からないなら、お父さんの意思を継いでほしい」母親の言葉に了一は幼少時に亡くした父親の姿を思い出す。父親の口癖であった「?血の通った義肢″を作りたい」その言葉がどういった意味を持つものなのか、了一は知る為、義肢装具士として義足を製作していた父親と同じ道を進む決心をする。

日本にたった5つしかない義肢装具専門学校に入学し、そこで一筋縄ではいかない個性的な仲間達と数々の経験をすることで義肢装具士とは、物づくりとは何なのかを学び成長していく・・・

「適合」をテーマにした物づくり青春グラフィティ！！

プロローグ　不発橋了一、決心す。

将来の夢。やりたい仕事。なりたい職業。そんなものが皆にはあったなんて知らなかった。

今まで考えたことが無かっただけで、僕にだって、いずれはそういったものが見つかるものだと思っていたのに。

どうやら、このクラス内で、ただ一人、僕だけがいつの間にか置いて行かれたようだ。

提出日は明日だっていうのに、この一週間、僕の手元にある進路調査票は白紙のままだった。

今夜中に何か書かないと、きっと先生に怒られるだろう。いや、怒られるだけならまだいい。

そんなことよりも、クラスの皆に笑われることの方が辛い。そう思うと、居ても立っても居られない。どうしようもない焦燥感と羞恥心が僕の感情に揺さぶりをかけてくる。

「あー・・・どうしよう。そんなこと言ったところで、所詮付け焼刃の進路希望に何の意味があるっていうんだ。無いものは無いんだから仕方がない。どうしようもないじゃないか。そんな事を考えて生きてこなかったんだ。僕の人生は平凡で、平和で、平坦な日常の繰り返しだ。勉強と母さんの代わりに家事をこなす毎日。それが今の僕で、僕の結果なんだから、将来の夢なんて急に言われてもなぁ・・・」

なんて、独り不平をごちたところで、事態は善進せず、もちろん調査票は真白のままだ。

いっそ嘘の申告でもして提出を遅らせようか。悪あがきかもしれないが、無意味な言い分を長々考えるより、よっぽどマシに思える。

そうだ。僕は風邪を引いてとても学校へ登校できる状態ではない。無理して行った挙句、受験を控えたクラスに菌を持ち込むなんて悪行以外の何物でもない。

「ごほごほ・・・なんだか喉が痛くなってきたような気が・・・」
「え？お兄ちゃん風邪でも引いたの？」
不意に部屋のドアが開いたかと思えば、妹の律が心配そうに言葉をかけてきた。
「ん？んー・・・そうかも。だけどそんなに酷くないから大丈夫だと思う。」
「駄目だよ！風邪は引き始めが肝心なんだよ！今クスリ持ってくるから、それ飲んでちゃんと身体を休めないと、また、前みたいに大変なことになっちゃう。」
お兄ちゃんは無理しすぎなの！と開けられたばかりのドアをそのままにして、そんな言葉を残してリビングの薬箱を取りに走る妹。
この前みたいにって・・・いつの話をしているんだか。
妹の律は心配性というのか、過度に僕のことを気に掛ける節があった。それもこれも過去の出来事が原因であるのは当事者である僕はもちろん知っている。
理由は僕の家族に起因している。
僕がまだ小学生だったころ、僕と妹はたった一人の父親を亡くした。
事故だった。
突然のことで当時はまだ父親を亡くしたことに実感が得られず、しばらく母親を困らせた記憶がある。母は僕らを養うために働きに出て、ずいぶん無理をしていたというのに、父親の死を理解できなかった妹と、それを分からせてあげることのできなかった僕は、無自覚に母を追い詰めた。そして、僕らを助ける為に奮闘した母は、その責任感と重圧感で疲弊してしまった。
いわゆる鬱を患ってしまったのだ。
その時はじめて僕は、自分の無力さを実感し、父親の存在の大きさを感じた。たぶんそれが切っ掛けだったと思う。父の死を受け止めたのは。小さいながらも確かに僕は男として、この家族を守ろうと思った。使命感を持った。それからは、母の代わりに家の仕事を

進んでやるようになったし、家族に心配させないよう、学業にも力を抜くことをしなくなった。
　幸い母は時が経つにつれ回復し、今では何も無かったかのように、僕ら兄弟のために、今でも仕事を頑張ってくれている。そんな経緯があるから、また母のように無理をして、いつ知れず、今度は僕が倒れるんじゃないかと、そんな危機感が律にはあるのだろう。
「だからってなぁ・・・仮病を演じる僕としては、なんだか罪悪感で逆に滅入るよな。」
　律の心情を計るにやるせない気持ちだ。それも単なる僕個人の不意手際な理由で、あんなに妹を心配させるなんて兄として失格というか。もう人間として駄目だよなぁ。
「お兄ちゃん持って来たよ！早くこれ飲んで、今日はもう寝なきゃだよ。お兄ちゃんが寝るまで私が傍にいてあげるから。ね？」
「いやいや、横に居られたら逆に眠れないっていうか、律っちゃんこそ、早く寝ないと明日の朝練に響くだろ？」
「そんなこと言ってお兄ちゃん、律に内緒で夜更かしする気でしょ？知っているんだよ。お兄ちゃんが先週から遅くまで起きて何かやっているの。それに律はちゃんと早起きできるんだからね！」
　？どやっ！？と胸を張り、腰に手を当てながら僕の夜更かしを怒っているんだか、はたまた自分の早起きに自信があることをアピールしているんだかよく分からない妹の主張に僕はただただ苦笑いをするばかりだ。
「あーはいはい。分かったよ。分かりましたよ。お兄ちゃんの夜更かしが何故か律っちゃんにバレバレで、しかも、それを知っている律っちゃんはお寝坊しない偉い子なんだよな。いやー本当に我が妹はどこに出しても恥ずかしくない自慢の妹だね。」
　というわけなんで、と妹の肩を掴んでそのままズルズルと廊下の方へと押しやる。
　僕の夜更かしを？この一週間？のことと知っているということは、間違いなく律も同じ時間を寝ずにいたということだろう。理由は言

わずもがな計り知れるわけで、そこを指摘するのも野暮だ。健気な妹の気持を受けとるのは兄の務め。

だが、それはそれ。

今、僕の状況は芳しくない。もちろん体調のことではなく、机の上にある例の物が白紙であるという事実にだ。

「にゃっ！ちょっ！もう！お兄ちゃん！！」

ドアの前まできて不満の声を漏らす律。可愛らしく上目使いで僕を睨んでくる。

「どうしていつもそうなの！　律が心配するといつもいつもそうやって律を遠ざけてさ、ズルイよ、私だって・・・」

「分かってるよ。いつも心配してくれてありがとな。でも、大丈夫だから、今日で最後だから。な？律っちゃんが僕を心配してくれているように僕も律っちゃんが心配なんだよ。部活の朝連に身が入らない妹を想うと安心して眠れないしさ。」

最後の駄目押しに妹の頭を撫でてやる。これをやると律が大人しくなるのを僕は知っている。子供のころから何かあるたびにやった、僕のなかの？妹取扱説明書？にある必勝戦法だ。

「もう。お兄ちゃんの、ばか・・・」

律は観念したようにそう呟いてから、最後におやすみなさいと言って自分の部屋に戻って行った。

さて、あんなに心配そうにしている妹の顔を見てしまっては、明日の学校をズル休みするわけにはいかなくなったな。

どうにかして、あの進路調査表を提出する算段をつけなくては。しかも自分が納得する形で。一晩でなんとかなる問題じゃない気がするけど、そんなことを言っている場合では無い。

どうしたものかと、行き詰まった考えをどうにかしたくて、一階のリビングまで降りる。

「あら、あなたもう寝たんじゃなかったの？さっき律が慌てて薬箱持って行ったけど、具合は大丈夫なの？」

リビングに来た僕の顔を見て、テレビのニュース番組を見て一人

寛いでいた母が近寄りながら心配そうに声をかけてくれた。
「いや、なんか眠れなくて。」
「そう。じゃあ、何か飲む？コーヒー・・・は駄目だから、お茶でいいわよね？」
テキパキと台所まで向かって冷蔵庫から常備してある麦茶をコップに注いでくれる母を横目にソファーに腰掛ける。
父を事故で失ってから、専業主婦を辞め、僕らを女手一つで育ててくれている母のそんな姿を見ながら僕は考えた。
ぼんやりとあの頃の記憶を引き出して。
今でこそ病を克服した、強く尊敬できる母。そんな偉大な？大人？である母は今の僕にとって最も身近なお手本である気がする。
当時でいえば今の僕なんかより、よっぽど切羽詰まっていただろう。有無を言わさない状況だったはずだ。多少の貯金はあったかもしれないが幼い子供二人を抱えた一人親ともなれば、高校生である僕でも、その苦労や不安を想像するに容易い。あの時、そんな状況の中心にいた母だから、きっと何かヒントをくれるかもしれない。
そんな縋るような期待が僕の頭の中に生まれていた。
「はい、どうぞ。」と、コップを両手に二人分持って、その一つを僕に手渡してくれた母は空いた片手で僕の額に手をやる。
その手は少しひんやりとしていて気持ちがいい。
「熱は無いわね。ま、大丈夫だろうけど、どうする？大事を取って明日は学校休む？」
「ん。大丈夫・・・」
「そう？で、何かあったの？そんな顔して？」
お茶を一口だけ飲んでから母は僕の対面ではなく一歩分離れた横のダイニングテーブルにコップを置き、そのままそこの椅子に腰掛けた。
「ん、まぁ・・・ね。なんていうか、さ・・・」
ほんの僅かな間。
話し口をどうすればいいのか僕は迷った。母の方には顔を向けず、

ただ手元のコップを見つめたまま、素直に自分の悩みを口にするのに逡巡した。それはきっと、あの時の事を母に聞くという抵抗があるからだろう。家族にとっていい思い出じゃない記憶を思い出させてしまう、そんな抵抗。ちらりと一瞬だけ母の顔を見ると、僕の想いとは裏腹にニヤリとした母の視線がこちらに向けられていた。

「あ、分かった。アレでしょ？」

「な、なにさ。」

むふふんーと口元を釣り上げた母の顔がはっきりと僕の求めている答えと違うことを告げている。

「そんなの決まっているじゃない。ズバリ・・・?恋?でじょ！？ね？そうなんでしょ？いやー、私もとうとう息子の恋愛相談に乗るときが来たかー！いやーん、お母さん困っちゃうなー、こういうのは律が先かと思っていたけど、そうかー、了一がねー。で？どの娘なの？一緒のクラス？あ、今は別にネットとかあるからそういう出逢いだけじゃないのよね。でも出会い系とかは駄目よ！まだ早いわ。そういうのは大人になってからにしなさい。まぁ了一に限ってはそんな積極的なことはしないか。となると、やっぱり同級生？いや、待って待って、後輩かもしれないわよね？年下かー、年下は可愛いものねー。で、どんな娘なの？可愛い？もしかしてもう告白しちゃったとか？いや、そりゃないかー了一だものねー。」

僕は今、「唖然」という言葉をそのまま顔面に張り付けた表情をしているはずだ。

母のとんでも勘違いに、別の意味での抵抗ある言葉を発してしまいそうになる。しかし、めちゃくちゃ興奮しているな。どうなっているんだ深夜の母のテンションは。こうして僕が固まっている間も「困るわー」とか「でもちょっと憧れてたのよねー」だとかブツブツと一人盛り上がる母。僕とは対照的な実に幸せそうで楽しげな表情をいている。

「じゃ、さっそく始めるわよ。了一の嬉恥ずかし恋愛相談！」

「しないわ！そんな相談！！」

え？と、みるみる母の表情が笑顔から狐につままれたかのような表情になり、さも残念とばかりに、しゅんとしたものに変化した。
「えー、違うの？・・・なんだー違うのかー・・・つまんないのー。」
勝手に先走っておいて、落胆されても僕の知る由もないわけだが。あからさまにテンションを下げて「じゃぁ、何の相談なの？」なんて言う母。そんなに楽しみだったのだろうか？僕の恋バナが。
「期待と違って申し訳ないんだけどさ。進路調査、明日が提出期限なんだ。」
「あー、そっち。」
目をぱちくりさせて、納得する母。
「そう。そっちの相談なの。クラスで提出してないの僕だけなんだ。それで、母さんに相談しようかと思って、母さんが働く時の話とか聞ければ何かヒントになるかなって思ったから。」
僕は、思っていたことをそのまま口にした。自分の進路について、今まで考えもしなかったという恥ずかしさと、それを辛い過去を持つ実の母に言うという抵抗を胸の奥にしまって。
それは意を決してというほどのものでは無いけど、それでも、僕にとっては間違いなく？悩みの告白？であることには違いなく、ちゃんと想いを告げることができたことに、安堵したものを感じていた。
「そうねー・・・お母さんの場合は、お父さんが居なくなって大変な時だったから、ただ必死だったというしかなかったからねー。少しでもお金を貰える職業ってことで今の仕事を選んだから。あんまり参考にはならないと思うわよ？それにね、了一には了一の夢とか、そんなんじゃなくても好きにやりたいことをやって欲しいってお母さん思うのよ。だから・・・了一は了一の思うように好きに生きていいのよ。最悪、食べるのに困らない程度に生きて行こうと思えば、人間なんとかなるものだし。それに、せっかくいい学校に入ったんだから大学だって行っていいのよ？何もすぐに就職しなさい

なんてお母さん言わないから。心配しないで。」
　僕と妹が大学に行くくらいの蓄えはなんとかなるから家のことは大丈夫と母は最後にそんなことを言った。それは、とても優しい母親の言葉だった。
「そっか、ありがとう。正直、今は自分でも、分からないっていうか、夢とかやりたいことって、考えてなかったからさ、不安だったんだ。」
　母の言葉を聞いて、僕の悩みが無くなったわけじゃない。でも、それでも、それが悪いことじゃないんだよと言われた気がして、少しだけ自分自身を見つめることができるような気がした。たぶん僕は心のどこかで、この不安の原因を理解していたのかもしれない。
　母子家庭の決して裕福ではない家庭環境において大学への進学は家計に大きな打撃を与える要因だ。
　夢を持たない僕にとって進路調査表の空欄を手っ取り早く埋めるのに、その選択肢は物凄く都合のよい魅力的なものであるはずだった。けれど、それは、もっともお金の掛かる選択であって、僕が調査票を提出できなかった最大の理由だ。
　そんな思いを心の隅に持っていた僕に「保留」という新たな選択肢を母がくれたんだと、そう思えた。「まだ、甘えていい」という優しい親心だった。
「ねぇ、了一。もしも、もしもね。」
　もう一度、部屋に戻って調査票に向き合おうかと思ったところで、おもむろに母が僕の意識を引きとめた。その表情は真剣で、大事な何かを言おうとしている、そんなことを想わせる表情だった。
「この先大学に行ったとしても、浪人したとしても、その時、また今と同じように悩んで、了一に夢が見つからず自分のしたいことが分からないって言うのなら、その時はね。お母さんは了一に、お父さんの意思を継いで欲しいって思うわ。もちろん了一がいいと思えばの話だけど。」
　父さんの意思。

その言葉だけが大きく強調されて僕の耳に響いた気がした。それはどういうことなのか？僕の中の父さんの記憶。決して多くは無いそれを必死に掘り下げる。でも、その言葉の意味に当てはまる記憶を僕は見つけられなかった。

「父さんは、僕に何か言っていたの？」

亡くなる前に、父さんから何か言われていたとしたら、そんな大事な事を僕は忘れるなんてしないはずだ。記憶に無いなんて、そんなことがあっていいはずがない。

なんで？という焦りが言葉になり、僕は母に聞き返した。

「ううん。了一に対して言っていたわけじゃなくてね。若いころのお父さんの口癖って言うのかしら？まだお母さんと結婚する前から、事あるごとによく言っていたわ。「僕は?血の通った義肢?を作りたいんだ」って。ほら、ね。お母さん足、義足だから。」

そう言って、自分の膝に手をやる母。その手とその手を乗せている母の足を見る。そこには外からでは一見すれば見分けの付きにくい義足があった。母はどこか懐かしむように、そっと自分の義足を撫でている。父の名残に触れるようなとても優しい仕草だった。

「きっとそれが、お父さんの夢だったのよ・・・」

「そう、だったんだ・・・」

「うん。そうよー。だってね、お父さんがくれたプロポーズね、笑っちゃうけど、「僕は君の足を元に戻すことはできないけれど、いつかきっとそれに代わる、ちゃんと血の通った足を作るから。そうすれば君は両足で僕と一緒にこの先を歩いていけるから、だから僕の隣にいてください。」って言ってくれたのよ。本当に笑っちゃう。」

母は笑って話してくれたけど、それは笑い飛ばせるものでは無い、父さんの想いだった。

「そうだったんだ。父さん、そんなこと言ってたんだ。」

「なんだか恥ずかしいわね。息子にこんな話しするの。」

はにかむ顔で僕を見つめる母は話を続ける。

「でも、結局あんなことになっちゃって、志半ばで天国に行っちゃったものだから、お母さんの足は、お父さんの望む義足にならなかったのよねー。お母さんは満足しているんだけど、やっぱり職人的には、まだまだ理想は遠かったみたいね。この義足があったから、お父さんが死んじゃった後も不自由なく仕事にも就けたわけだし、十分凄いのにねー。」

ポンポンと膝を叩きながら「いつも御苦労さまです」と自分の義足に呟いて、母は口を閉じた。

この時僕は、初めて聞いた父の言葉を頭で反芻しながら、じっと母の義足を見つめていた。

父の言う？血の通った義肢？それはいったいどういうものを指す言葉だったのだろう。

考えたって答えなんて得られるわけもない。

だから僕は、その言葉を頭ではなく心に留めることにした。

「ありがとう母さん。父さんのこと教えてくれて。知らなかったよ。父さんがそんなこと言っていたなんて。そっか、そうだったんだ。」

どういたしましてという母の言葉を聞いて自分の部屋に戻ることにした。

さっきまで、大学進学でもして夢を見つけようと考えていた僕の想いは、綺麗さっぱり消え去っていた。

相変わらず僕には夢が無いままだけれど。でも、今、はっきりと分かった。

目指すべき僕の目標。

それが、いずれちゃんとした？僕の夢？になるために――

こうして、僕の悩みの種は、静かに芽を咲かすため、薄暗い部屋の中で、机の上にある白紙のままの進路調査表を見つめる僕の中に蒔かれた。

その種は、生前の父が行っていた職業の名前。

進路：義肢装具士

僕はペンを握る。

プロローグ　不発橋了一、決心す。（後書き）

プロローグ読了お疲れさまでした。

次回から本編突入です。お楽しみに・・・？

PDF小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2785bx/

君と僕の適合理論

2015年6月11日21時26分発行